

私たちの のオモ二

[어머니]



本田靖春

Yasuharu Honda

新潮社

私たちの
の
オモ二^[어머나]



本田靖春

わたし

私たちのオモニ



著者 本田靖春（ほんだ やすはる）

一九九二年二月二〇日 発行

発行者 佐藤亮一

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(3266)五一一 編集〇三(3266)五四一一

振替 東京四一八〇八

印刷所 株式会社三秀舎 製本所 大口製本印刷株式会社

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Yasuharu Honda 1992, Printed in Japan

ISBN4-10-363502-9 C0095

目次

第一章 再会

5

第二章 深川

59

第三章 密航

89

第四章 闘病

120

第五章 広^{まだ}場^ん

148

装画·趙如珠

私たちのオモニ

第一章 再会

物書きという職業柄、同業の方や出版社から新刊を送っていただくことが少なくない。そのなかには、差出人に心当たりのないものもまざっている。一九八八年六月初旬に届いた『海を渡った朝鮮人海女』（新宿書房刊）もそうした一冊であった。この本は金榮・梁澄子の共著とあるが、私はそのどちらの名前にも憶えがない。そこで、包装はほどいたものの、しばらくのあいだ仕事机のわきに積んだままにしておいた。読む必要に迫られている本が、何冊か溜まっていたからである。

そちらのほうが一段落して『海を渡った朝鮮人海女』を手にしたのは、異常な冷夏でその実感はないものの暦の上で夏に入ってからのことであった。何気なく扉を開くとそこに封筒がはさまっていて、その中には次の文面の手紙がおさめられていた。

へ前略

はじめてお手紙します。

父、金宙泰より日頃から先生のお噂、『まだん』の頃の話などうかがっております。以前より、是非一度お目にかかりたいと思っておりますが、この度拙著を出版いたしましたので、御一読願いたいと思い、先ず送らせていただきました。本来ならば直接お宅を訪ねて先に御挨拶申しあげなければならぬところですが、いきなりお手紙お送りしたことお許し下さい。

『海を渡った朝鮮人海女』は五年前から少しずつ、千葉県で今も潜っている済州島から来たおばあさんたちの聞き書きをあつめ、一冊にまとめたものです。友人との共著で、私は後半を執筆しました。父の仕事、鍼灸しんきゅうの方を手伝いながらのことでもあり、何よりもはじめてのことで勉強不足とあって、とてもお見せできたものではありませんが、私たちなりに一生懸命歩いてまとめたつもりです。お読みいただき、御指導下されば幸いに存じます。

父同様、鍼灸師の免許を取得し、本職はそちらのほうですし、このような本をつくることは決して片手間ではできないと思います。しかし、在日朝鮮人の足跡を残すべく（少しでも）、数少ない一世代たちにこれからも会って、話を聞いていきたいと思っております。

お忙しいこととは存じますが、よろしくお願い申し上げます。

金栄

金宙泰キムチュウテさんに本を書くような年齢の娘さんがいたのか。私はちよとした驚きをおぼえて、巻末の著者紹介の欄を開いた。そこには次のように書かれてあった。

へ金 栄（キム・ヨン）

一九五九年、東京に生まれる。東京朝鮮中高級学校を経て和光大学人文学部を卒業。現在、鍼灸師としての職業に携る一方、四人の在日同胞女性と共に朝鮮女性史読書会を主宰し、『女性通信』（ヨソントンシン）を編集、発行している。

落ち着いて考えてみれば、金宙泰さんは一九二七年の生まれなのだから、社会人の娘さんがいて不思議はない。いや、いるほうが自然である。

私は金さんと疎遠になってからの歳月を改めて数えてみた。そして、十五年が経過していたことに気づく。

その間、年賀状の交換だけは続いていた。それも、決まって金さんから先に年頭の祝詞をいだいたからである。私は新しい年を迎えるたび、今年こそはぜひお会いしたいものです、などと年賀状の余白に書きながら、ついついその言葉を裏切り続けた。

ひとつには、ある時期、金さんが生活の根拠をそれまでの横浜市鶴見区つるみから信州の山奥に移して、お互いのあいだの距離が遠くなってしまったということもある。だが、それは言いわけにならない。栄さんの手紙を再読しながら、私の心の中には、再会の約束を果たさずに来たことに對する年来のうしろめたさが、甦よみがえった。だが、その一方で、あらたな感慨がわき起こったのも事実である。

手紙は、若い女性たちのあいだで多く見受けられる丸っこい変体文字などではなく、きちっと

した丁寧な書体で書かれていた。そして、それは、文面の折り目の正しさをよりいっそう私に印象づけた。

生真面目というのは、年長者に贈る言葉ではないのかも知れないと思うのだが、金宙泰さんの人柄を伝えようとするとき、この表現は欠かせない。栄さんは父親からその美質を受け継いでいる。手紙はそれをおのずと物語っていた。しかも、父親から娘へと引き継がれたのは、そうした性格上のことばかりではない。

金宙泰さんは、永年にわたる病氣、生活苦とたたかいながら大学院の博士課程にまで進み、政治思想史を専攻した知識人で、一九七三（昭和四十八）年に在日朝鮮・韓国人のための季刊雑誌『まだん』を創刊する。金さんがこの雑誌をはじめた目的の主たるひとつは、年々少なくなっていく一世たちの個人史を掘り起こして記録するということにあった。

しかし、六号を出したところで、志半ばに終わる。金さんの病いが重くなつて、刊行の断念を余儀なくされたのである。そのような事情をいささか知る私は、栄さんからの手紙とサイン本を前にして、感慨ひとしおであった。

彼女による『女性通信』の編集・発行、『海を渡った朝鮮人海女』の出版には、疑いもなく父親の志が引き継がれている。そう考えると、無沙汰のうしろめたさもどこへやら、私は昂揚した気分で金さんの自宅の電話番号をダイヤルしていた。そして、金さんと十五年ぶりの再会を果たしたのである。

栄さんの本が届いたところから書き起こしたのであるから、その話を続けるのが流れとしては自然なのだが、それはひとまず後に譲って、金宙泰さんと私との出会いについて述べておいた方が、全体としてすわりがよさそうである。そうなると、そのきつかけをつくってくれたKという若い日韓国人女性と私との関わりについても書いておかなければならぬ。というわけで、私のペンは本筋に入る前にいきなり脇道へそれるのだが、どうかおつき合いをいただきたい。

七三年の秋、私は初めての単行本となる『私のなかの朝鮮人』（現在は文春文庫）をまとめるために、補足取材をしていた。この本は、三三（昭和八）年に京城（現ソウル）で生まれ、中学一年の夏に引き揚げてくるまでの十二年半を植民者二世として朝鮮で過ごした私の、自己確認の書とでもいったものである。

七一年春にフリーの生活に入ってからそのときまで、私はもっぱら雑誌の注文原稿をこなしてきた。十六年間にわたる新聞記者の経験はあったが、雑誌の世界には何の実績もなかった私にとって、編集部から与えられたテーマを限られた時間内でこなすのは、一種のプロ・テストともいえた。物書きとして社会的に認知されるためには、一度は通り抜けなければならぬ関門である。そう割り切ってやっていたのだが、それが二年余も続くと、精神的な疲労がたまってくる。

私は注文原稿をすべて受けたわけではない。むしろ、断る場合の方が多かったくらいである。

そのために、「仕事を選びすぎる」と親しくなった編集者から忠告されることもあった。

そのように、気の染まないテーマにはなるべく手を出さないようにしていたが、注文原稿はあくまでも注文原稿である。自分の気に入ったテーマばかりが与えられる道理がない。それで、次

第に精神的な疲労が蓄積されていくのである。

それを解消する方法はただ一つ、自分自身のテーマで書くことである。とにかくにもプロ・テストを乗り切った私は、新聞記者だったときから温めていた民族差別の問題に取り組むことにした。内的必然性という堅苦しくなるが、植民者二世として朝鮮民族を抑圧し差別する側に生まれついた私にとって、これはそういう要素を含んだテーマなのである。

私の記憶には、ほとんど消えかかっている幼いころのものも含めて、さまざまな見聞や体験が刻み込まれている。それらは、いったい何を意味しているのか。引揚者の多くは、過去を個人的な追憶でしか語らないが、そこからは新しいなにも生まれてこない。いやしくも私はジャーナリストである。京城での少年時代は恵まれていて楽しかった、では済まされない。

私の記憶は断片的であるが、そのどれをとってみても、そこには日本による朝鮮統治という「歴史」がからんでいるのは疑いもない。まずその検証から始めよう。そうすれば、自分が何者であるかがはつきりしてくるはずである。使い古された言葉であるが、それは物書きとしての自分の原点をさぐる作業にもなるはずであった。

自分の立つべき位置が明確になり、目指すべき方向が定かにならないかぎり、私の書くものは私のものであって私のものではない。文章が究極的に問われるのは、それが筆者の内的必然性に発しているか否かである。『私のなかの朝鮮人』は、「四十にして立つ」ではないが、遅まきながら四十にしての自立の第一歩であった。いま読み返してみると、幼稚さばかりが目について、四十歳（出版時は四十一歳）でこの程度では——と自己嫌悪に陥るが、自分の原点と方向性だけ

はどうにか確認できているように思う。

『私のなかの朝鮮人』の取材は、自己点検に他者の視点を借りるという意味を持っていた。この場合の他者は、戦後もなお民族差別に苦しんでいる在日朝鮮・韓国人に如くはない。そこで、上智大学の常勤講師をしているK嬢と会い、彼女に助言を求めた。

「私とはちよつと立場が違うんですけど、たいへんあたまの切れる人で、理論家なんですよ。きつと参考になると思いますから、会つて話を聞いてみませんか」

K嬢がそういつて推薦してくれたのが、金宙泰さんだったのである。立場が違ふといったのは、彼女は韓国籍で金さんは朝鮮籍だということである。それまで私は朝鮮籍の人とはほとんどつき合いがなかったので、かえつて好都合であつた。

ことあたらしくいうまでもないが、人との出会いは不思議なものである。いま私は金さん一家と家族ぐるみでつき合いをしているが、K嬢と私との出会いがなかったとしたらそれもなかったわけで、この本も世に出なかつたことになる。そこで、いよいよ協道に入るのだが、K嬢のこのを書いておきたい。

六九（昭和四十四）年秋、読売新聞ニューヨーク支局にいた私は、にわかに助手を採用する必要に迫られた。それまで助手として働いていたSという日本人青年が、同じ読売のワシントン支局に引き抜かれたからである。

そのきつかけは、何かの手伝いで、S君をワシントン支局へやつたことにある。ときのワシン

トン支局長は、いまや社長となった渡辺恒雄氏であつた。そのナベツネ氏の眼鏡にS君は叶つたのである。

彼は早稲田大学政経学部新聞学科を卒業した後、カリフォルニア州立大学バークレー校に留学して修士課程を修了、読売についてはなかつたが手紙をニューヨーク支局へ書き送つて、私の前任者に採用された。やや狷介な性格で、その点がジャーナリストとしてはどうかという危惧を私は持つていたが、たいへん真面目な努力家ではあつた。そういう面がナベツネ氏に買われたのであろう。

S君は、自分の進路について悩んでいた。ニューヨーク支局で助手をしていたのでは記者の道が開けない。私も相談に乗つて、時期を失しないうちに日本へ歸つて、読売の入社試験を受けるのが最も現実的な方法であろう、という結論に達した。だが、その年の試験には、時間的にもう間に合わない。狙うとすれば来秋である。私はそれまでの間の彼が希望する時期に帰国することを諒承していた。

そのS君が、ワシントン支局へ行つたきりなかなかニューヨークへ戻つてこない。私には同僚が一人いるのだが、彼はアポロ計画の方にかかりきりで、NASA（米航空宇宙局）のあるテキサス州ヒューストンに出張する機会が多く、ニューヨーク支局は実質的にほとんど私一人という状態が続いた。

そうこうするうちに、ようやくS君が戻つて来たが、彼のいわく、渡辺支局長に勧められたのでワシントンへ移るといふ。なんでもナベツネ氏は、来年の入社試験に通れるようおれが計らつ

てやるから、それまでワシントンで実地の勉強をしろ、といったのだそうである。

裏口入社のきらいがないではないが、その誘いに飛びついたS君の気持ちはそれなりに理解できる。そこに到るいきさつなどに私の価値観とは相容れないものがあるが、よくもわるくも彼自身の一生である。何もいわずに、彼の好きにさせた。

それでこの件は片が付いたが、ニューヨーク支局にいた穴は一日も早く埋めなければならぬ。取り急ぎ、ニューヨークの「日本人クラブ」の掲示板に求人者の貼り紙を出した。それを見て最初に電話をかけてきたのがK嬢であつた。

ここから先のことは『私のなかの朝鮮人』で一部を書いているが、K嬢は東京生まれで、目黒区内の中学校を終えたあとアメリカン・スクールに進み、卒業後、ケンタッキー州立大学に留学して学士号をとり、いまはプラット・インステイテュートの修士課程にいらつたという。専攻は東洋美術史ということだが、話した感じはしっかりしているし、経歴も助手としては申し分なさそうなので、こう返事した。

「たぶん手伝つていただくことになるでしょうから、ともかくオフィスに来て下さい」

それを受けて、彼女はためらいがちにつけ加えた。

「私、日本人じゃないんですけど」

そういわれば、あとは聞かなくてもだいたいわかる。おそらく彼女は在日韓国人二世であるう。

実のところ、貼り紙を出したときに、私はこのような応募があることを、まったく予想してい

なかった。S君の後任ということで、無意識のうちに「日本人」の「男性」を期待していたのだと思う。しかし、国籍も性別も問題ではない。要は、支局の仕事を能率的に手伝ってくれる人であれば、それでよいのである。

「ああ、国籍や性別はかまいませんよ」

と私は答えた。

支局で働くようになってから、K嬢は何かにつけて、私のことを「おかしい日本人」といった。物の考え方が、彼女がそれまで接してきた日本人とは違うというのである。確かに、そういう面はあるかも知れない。とくに、日本や日本人について語るようなとき、自分でもそう感じる場合がままある。私は情緒的な一体感でつながっている日本人の集団主義に、どうしてもなじめない。一つの集団の成員には、事柄の是非善悪にかかわらず、集団への帰属意識が第一義的に求められる。最近明らかになった証券業界の不祥事は、その典型的な表れといえるであろう。

証券会社の人間であれば、大口投資家への損失補てんはともかく、証券業界がこぞって一般投資家を食いものにしていく事実は、だれもが知っていたはずである。だが、問題が表面化するまで、内部告発者はただの一人も現れなかった。なぜか。日本の集団主義に照らせば、それは許されない裏切り行為としか見られないからである。「企業の社会的責任」などは、それこそ絵空事にしか過ぎない。そういう集団を、私なら愛することができない。読売を辞めることになったのも、同じ理由で愛せなくなったからである。

集団主義のもう一つの特徴は、その排他性にある。京城から引き揚げて来て初めの一年余を九